いくさ世（ゆう）を生きて

沖縄戦の女たち

真尾悦子

いくさ世（ゆう）を生きて

沖縄戦の女

真尾悦子

筑摩書房

真尾悦子（ましお　えつこ）
1919年東京に生れる。旧制共立女子専門学校卒業。作家。主な著書に『たった二人の工場から』『旧城跡三十二番地』『土と女――出稼ぎ未亡人とその周辺』『地底の青春――女あと山の記』などがある。

いくさ世を生きて――沖縄戦の女たち

一九八一年九月二十五日　初版第一刷発行
一九八二年八月　十　日　初版第七刷発行

著　者／真　尾　悦　子
発行者／布川角左衛門
発行所／株式会社　筑摩書房
東京都千代田区神田小川町二―八
電話東京二九一―七六五一（営業）
二九四―六七一一（編集）
振替東京六―四一二三
郵便番号一〇一―九一
印刷／多田印刷　製本／積信堂

©真尾悦子　一九八一

Printed in Japan　0095-85171-4604

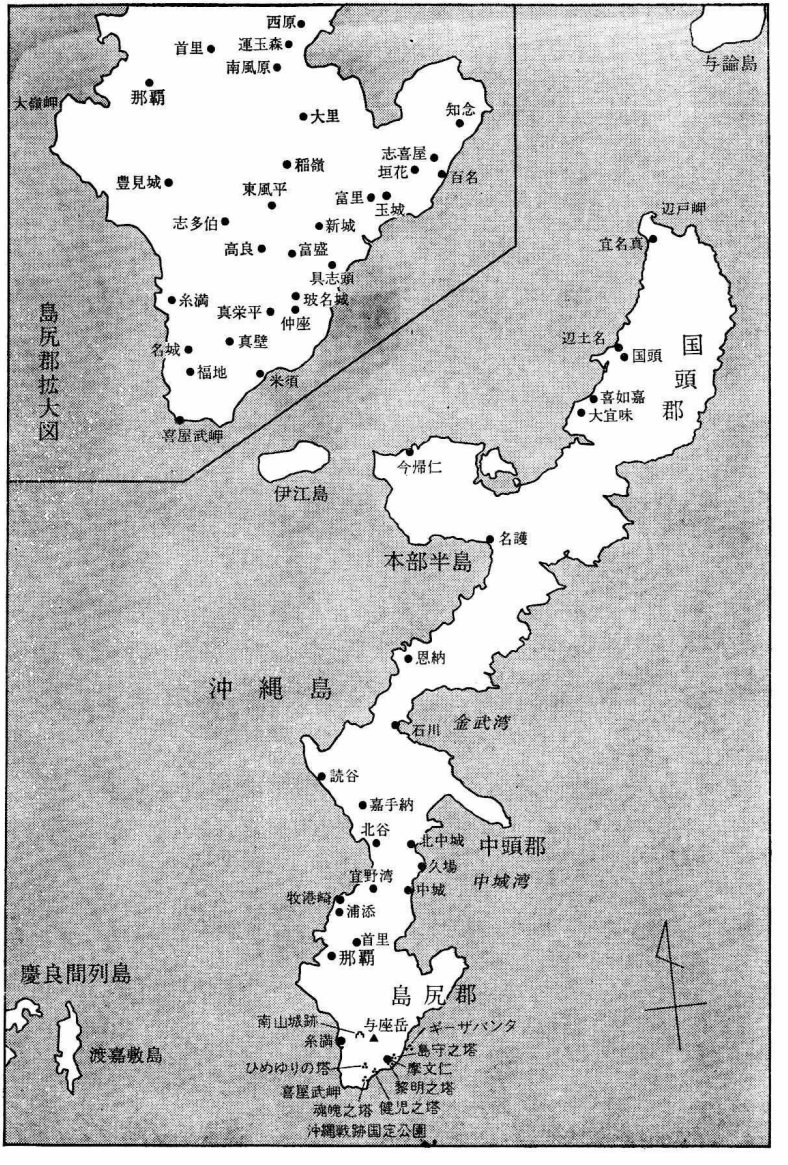
乱丁・落丁本の場合は，御面倒でが小社読者係宛に御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

目次

第一章　うわいすうこう……5
第二章　ぬちどたから……40
第三章　いくさ世……117
第四章　アメリカ世……165
第五章　あかばなぁ……203
あとがき……221

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.c

いくさ世（ゆう）を生きて——沖縄戦の女たち


西原
首里
運玉森
南風原
大嶺岬
那覇
大里
知念
与論島
志喜屋
垣花
百名
稲嶺
豊見城
東風平
富里
玉城
志多伯
新城
高良
富盛
具志頭
糸満
真栄平
玻名城
仲座
真壁
名城
福地
米須
喜屋武岬
島尻郡拡大図
辺戸岬
宜名真
辺土名
国頭
国頭郡
喜如嘉
大宜味
今帰仁
伊江島
名護
本部半島
恩納
沖縄島
金武湾
石川
読谷
嘉手納
北谷
北中城
中頭郡
久場
宜野湾
中城
中城湾
牧港湾
浦添
首里
那覇
慶良間列島
島尻郡
南山城跡
与座岳
ギーザバンタ
糸満
兵隊守之塔
渡嘉敷島
ひめゆりの塔
摩文仁
喜屋武岬
黎明之塔
魂魄之塔
健児之塔
沖縄戦跡国定公園

第一章　うわいすうこう

五十三年五月である。

那覇空港で荷物を受け取ろうとしていた私を、山城永盛さんがロビーの人混みからせかせかと手招きをした。まるで、電車かバスで隣り町からきたのを出迎えるようなあんばいであった。

「沖縄は近いでしょう――」

それだけ言って、彼は私を車に乗せた。

童顔に、長いまつ毛、濃い眉は、二十年前とまったく変っていない。髪も黒々としているし、表情も精悍そのものである。昔とちがって血色がいいから、とても五十歳にはみえなかった。

空港を出て、広い舗装道路を走りながら、私は腰を浮かしてきょろきょろと見回した。午後の陽ざしをうけた高い街路樹に、真紅の花が点々と咲いていた。県花の梯梧だという。しかし、助手席にいて何となく落ちつかないのは、右側通行のせいだと気がついた。交差点で右折するとき

など、一瞬ヒヤリとする。だが、それも七月には左に変更されるそうで、カバーをかけた新しい信号機や標識が目についた。

まもなく、左手に頑丈そうな金網の塀があらわれた。向こうは港湾らしかった。眼を据えると、水の上に、四角い、巨大な怪物が並んでいた。周辺に人影はなく、赤茶けた鉄錆が際立って見えた。

「あれですか？　上陸用舟艇ですよ。三十三年前に、あんなのでアメリカ兵がどんどん上がってきたんです」

彼は、ハンドルをちょっと持ちかえて前方を正視した。立体交差の国道、高いビル、がっしりとしたコンクリート造りの家々。東京の街とちがっているのは、家も道も妙に白っぽいことくらいだった。約三十分で、浦添市の高台にある彼の家へ着いた。

瀟洒な洋風建築である。レンガ色にちかい土の庭には、濃緑の厚い葉をつけた樹木が整然と植えられていた。山城さんは、巧みな操作で車を玄関脇のガレージへ入れている。

三十四年十一月に初めて会ったときの彼は、いまの半分ほどに痩せて、顔色がひどく蒼かった。当時、私は福島県平市（現・いわき市）で、胸郭成形手術をした夫と二児の暮しを、手内職でかつがつ支えていた。その身辺を書いた私の作品を読んだといって、突然訪ねてきたのである。

二十歳代の彼は、夫と同じ結核回復者だった。療友会をつくって、医療の遅れている沖縄から、ようやく空きベッドがふえはじめた本土の結核療養所へ、手術可能な患者を送り込むために奔走

している、と言った。

山城さんは、ポケットから黒表紙の出国証明書を出して見せた。日本人が、沖縄から福島県へくるのに、パスポートが必要だったのである。手に取って眺めているうちに、敗戦で、沖縄が外国になってしまった、という思いが突き上げてきた。

そのとき、昭和十年代に首里から東京の学校へきていた同級生、勝連（かつれん）ハツさんの顔が脳裏に浮かんだ。

「首里は、とくに集中攻撃をうけて廃墟になりましたからね。手がかりがつかみにくいと思いますよ」と言う彼に、どうか、さがして下さい、とお願いした。

その後、彼の主宰する療友会の機関紙や沖縄タイムス紙に、何度も尋ね人の記事を出してもらったが、ハツさんの消息は知れなかった。

〈県民の三分の一は戦死したのです。女子は自決した人も多い。小さな島ぐにを、これだけさがしても見つからないのは、もう、絶望かもしれません〉

彼からの便りには、かならず本土復帰をねがう言葉が添えられていた。三十六年には、百名の結核患者を本土委託治療に送り出した、という手紙が届いた。四十二年にはリハビリテーション施設、その二年後に、回復者の授産センターをつくった、と、きちょうめんな字で書いてきた。

昭和四十七年五月十五日に、沖縄は日本に復帰した。

その年に、山城さんは沖縄県厚生事業協会を設立し、さらに身障者授産施設を完成させた。彼

は私に、ぜひ一度沖縄へきてみないか、と誘ってくれたのである。

彼はしかし、二十年ぶりに会った私には、あまり仕事の話をしなかった。

「ベランダへ出てみませんか」

欄間をもふさいだ、高い天井までの長い木製の雨戸を、ガラガラと繰った。台風に耐えることと、泥棒よけを兼ねているのだという。

そこには、手の届きそうな星空があった。風のなま暖かい、亜熱帯の夜である。

「何もかも、復帰してから変ったんですよ」

復帰前は、アメリカ軍の軍用道路以外は舗装されていなかったし、家もまばらだった、と、彼は眼下にひろがる那覇の町々の灯を眺めながら言った。

翌朝、私は何気なく新聞をひらいてぎょッとした。埋没していた、戦争当時の壕が発掘されたという、写真入りの記事である。

崩れた壕の壁際に、白く丸いものがるいるいと重なっていた。人骨なのだ。錆びた鉄カブトや飯盒、万年筆なども出てきた、と書かれている。那覇市内なのである。

早朝マラソンから戻った山城さんは「このあいだもそんなことがありました。遺骨は、まだまだ出るはずですよ」とケロリとしていた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

あり余る食料品、衣料、観光みやげ等々で、戦争など忘れ果てたように見える町である。その繁栄の真下に、戦後三十三年を経てなお、誰とも知れぬ、無数の白骨を抱く壕が発見される。それが、沖縄では日常茶飯事なのか、と私はあらためて彼の顔を見た。

「せめて本島だけは、端から端まで見てほしいと、いろいろプランを立てているんですがねえ。まず、この近くの、去年私たちの協会がつくった老人ホームを見ていただきましょうか」

百名収容の特別養護老人ホーム〈ありあけの里〉は、浦添市前田にあった。施設のほかには人家もなく、車も滅多に通らない。静かすぎるような台地である。

しかしそこは、沖縄戦で、首里を目指す敵の猛攻撃を阻止した日本軍が、昭和二十年四月十九日から、凄(すさま)じい死闘を繰り返した地区であった。五月四日に総反撃を決行して、ついに敗れたのである。日本軍は、五千名の死者を出したという。

戦前は、この丘の下にある盆地が、人口千二百の村落であった。そのときの戦闘で、村民二百九十五名がかろうじて生き残った。丘の上の樹木をはじめ、村は小屋一つ残さず焼き払われてしまった。

現在の、緑濃い環境と、広い敷地に建つ明るい施設からは、とうていかつての激戦場を想像することはできない。

ホームの玄関ロビーには、熱帯魚の大水槽が据えられ、面会用のソファーなどもある。階下は

すべて寝たきり老人の病室。二階へは、手すり付きのスロープでらくに上れるようになっていた。

左手、談話室の奥にある、二十畳敷くらいの和室で、私は老女たちと一緒に純白のおむつをたたみながら、いろんな話をした。

戦後の転変を語る人は少ない。誰もが、重い口をひらくと、いきなり、三十数年前の、戦争の恐怖を洩らすのだった。

――カマドさんは、ことし六十九歳になったという。

沖縄戦で、幼かった息子二人を失い、防衛隊で片脚をなくした夫とも、八年前に死別した。彼女は、すでに何か所もの老人ホームを遍歴したそうである。

「ここは安気（気楽）だから、もう死ぬまでどこへも行かんさ」

低い声で笑うカマドさんは、骨太で、背すじもシャンと伸びていた。

「なに、丈夫なようでも、膝に、アメリカさんのタマが入っとるからね。人並には歩けんさ。手術しても、この破片は取りきれん言うて、医者は、絶対治らん言うてからに――。小満芒種（雨季）がくると、きつう痛みよる。仕方ないさア、戦争でやられたんじゃからね」

戦前、彼女は首里で菓子屋をしていた。

「とうちゃんの作るまんじゅう、うまい言うてね。繁昌していたさ」

昭和二十年五月。三十六歳だった。

「子どもはあんた、十三歳、七歳、四歳、一歳。四名も引っぱってからに、六十歳になる舅さんと姑も一緒に、タマの下をくぐりくぐりして逃げたのよ。姑はもうトシいってるからね、子どもなんか見てもらえんさ。わたしは、にわとり追うみたいに、六名の家族つれて壕やら墓やらへ入っては隠れよった」

〃どこでも、一時しのぎしかできん。ヤマト（本土）の兵隊に追い出されたり、タマがきよったりしてよ〃とそこまで言って、彼女はきつく眼を閉じた。私は黙って手を動かしながら、つぎの言葉を待った。

「タマ、いうのはね、どないしても、当る者には、当る。あんなふうになってしもうたらもう、どこへ行ったら安全、という場所はないんだから、運命さ、ねえ。沖縄がほんとのいくさ場になるなんて、考えてもみんかったけどよ。とうちゃんは召集で南部へ行っとったから、わたしら七名は三月からずっと首里の壕で暮しとった。四月の末になったらヤマトの兵隊がきて〃おばさん、ここはあしたにも敵がくるかもしらんから、早く出なさいよオ〃と言うた。さア、どこへ行くかねえ、と考えて、上の二人の子どもに、味噌やかつおぶしや砂糖をふろしきで背負わせて出たのよ。舅たちはトートーメー（位牌）を大事に持つのがやっとさ。けっきょく、識名にある、うちの墓に十五日も隠れとった。食べ物はあっても、毎日毎日雨がひどうて、火を燃やしきらん。うっかり煙を出したら、すぐにタマが飛んでくるからね。芋をナマでかじったさ」

アメリカ軍は、隣接の浦添まできていた。艦砲射撃は首里をめがけて集中した。繁多川をはさ

んだ向かいの識名は、墓の石室にいても轟音のたびに体が揺すれた。

舅姑は、先祖の墓を荒した報いでこんな目に遭うのだ、とカマドさんを責めた。もはやここで死ぬほかはない、と動こうとしないのである。

「死ぬのはいつでも死ねるからねえ。子どももいることだし、逃げられるだけ逃げよう、と言うたですよ。それにね、まだまだ、日本軍がいくさに負けるはずがない、最後は絶対に勝つ、と信用していたからね。いっとき苦しいのを辛抱すれば、本土から応援がきて捲き返すにきまってる、とそう言うて姑たちを連れ出したのよ」

道はどこも穴だらけであった。艦砲でえぐられたくぼみに雨水が溜って、大小の池になっていたのである。

「とても、子どもには渡りきれんさね。艦砲の穴に落ちてもぐれば、溺れてしまうくらい、大きくて、深かったよ。一人一人抱いて渡しても、またすぐつぎの穴にぶつかる。橋はね、敵の戦車が通れんように、友軍（日本軍）がわざとダイダマ（ダイナマイト）で壊しおったからね。だから、遠回りして、わき道を見つけて歩かんならん。昼は艦砲が激しいから隠れとって、夜にあるくのさ。照明弾がユラユラ落ちてくると、それッ、いまのうちに走れッ、言うてね。あれは、パァーッと明るくなるけど、すぐあとにタマがドカンドカンくるのさ。まともに当らんでも、あおられて引っくり返るよ。わたしらばっかりでない。もう、道いっぱい、ぶつかりぶつかり、押しどけて歩くほど、おおぜいが右往左往しとったからね。人が倒れとっても、踏んで走るしかないのさ。

身持ち（妊娠中）女や、子ども背負うたおばあさんが死んでるのにも出会うた。三歳くらいの子どもだけが生きて、泣いとったりする。それでも、他人のことなんか考える余裕がないわけさ。自分の家族だって、ちょっとゆだんすりゃ、はぐれてさがさんならん始末さね」

一度、子をおぶったまま、泥水の穴にずるずるウと落ちてしまった。水田と同じ泥沼である。もがけばよけいに潜ってゆく。

「あれに沈んだら起きられんよ。もう、ダメか、と思うたときに、灯りがついた（照明弾が投下された）。舅がわたしを見つけて手ェ引っ張ってくれたのよ。すぐにタマはきたよ。少し先にいた人がたが何人かやられて、手足が千切れて飛ぶのが見えた。そンでもね、自分さえ助かれば、ああ、明るうなってよかった、と思う。勝手なものさねえ」

彼女は、それが癖なのか、ときどき手を休めてふーッと深い溜息をついた。

「アメリカーは、四月から沖縄に上陸しとったからね。いつ、目の前へきてわたしらを撃つか分らん。子どもが眠たがって泣いても、夜しか歩けんのよ。哀れして（かわいそうになって）どこか、頭だけでも隠せる場所を見つけて眠らせよう思うたって、壕はダメ。みんな友軍が占領しとってからに、子連れは絶対に入れてくれよらん。殺す、言うもんね。仕方ないから、樹の下にたアだ木っ葉敷いて寝かせたさ。どこも、雨でビショビショ。わたしの膝の上に子どもらの頭並べてよ。足はみんな泥水の中につかっとった。大きい子は、おじいとおばあの膝借りて、顔だけ水につからんようにしとった。鼻と口に水が入らな、上等よ」

壊された橋桁のかげに、七人が押し固まって隠れた日があった。六月十日ごろではなかったか、とカマドさんは言う。

「アメリカさんはね、夕飯どきになるとタマ撃つのを休むのさ。そのときに、友軍が忍んできて、水くれ、言いおった。前の晩に命がけで泉へ行って汲んできた水、子どもの分しかないからこらえて下さい、言うたらね。くれなきゃ叩き斬るぞって、向ってきおった。長い剣を吊った兵隊よ。どうぞ、どうぞ、言うて水出したさ。恐ろしかったねえ」

その夜半に、ようやく無人らしい壕を見つけた。夜明け前に身を隠したかったのである。

「誰もおらん思うたのに、奥のほうから、ならん、ならん、て怒る声がしよる。友軍がひそんどったのよ。兵隊が死んだら、沖縄を守ることができん。住民はいくさの邪魔じゃ、言うてね。いくさは、誰のためにしとるんか、友軍は、沖縄の、何を守ってくれるんかねえ、と思うても、兵隊には絶対口答えはできんからよ。黙って出たさ。拾うた木の枝をみんなの頭にかぶせて、道端に固まっとった。そんな偽装したって、トンボ(アメリカ軍偵察機)からはまる見えさねえ。昼間、低空してきたときは、こっちからもよう見えたよ。アメリカーは、パンッひとつで乗っとった。人間の影を一人でも見つけたら、ねらい撃ちしてくるわけよ」

あれは、確か、真壁(現・糸満市)の近くじゃった、と、彼女はたたみ終えたおむつの山をトントンと叩いた。そして、ガマ、といわれる、大きな自然洞窟をみつけた、と言うのである。やはり、奥に兵隊がおおぜいいた。子どもは入れるな、と押し殺した声が聞えた。しかし、もはや

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com